

岡山醫學會第385回通常會

同會は豫定の通り 本月 16 日 午後 4 時より
岡山醫科大學第 1 講堂に於て開會せり緒方庶
務主幹開會を宣し直ちに次の講演を始む。

1. 精系に原發せし混合腫竝に其の

腹部轉移腫瘍の 1 例

岡山醫科大學津田外科教室

(主任津田教授)

醫學士 宮 木 輝 夫 君

余は 28 歳の男子の精系と 副睪丸との間に 發生
せし腫瘍より轉移せる異常大腹部腫瘍例を経験せ
り。患者は約 2 年半前廣島縣立病院に於て、何等
自覺症無かりし右側精系腫瘍の別出手術を受け、
組織學的に「ヒダチーデ」より發生せる小圓形細胞
肉腫と診斷されり。然るに術後 1 年 2 箇月にして
右側季肋下部に手拳大の腫瘍を生ぜし爲め同病院
を再び訪れたるに、精系腫瘍の腹部轉移ならんと
て本年 3 月まで約 1 年 2 箇月間に亘り 7 回 X 線照
射療法を受けたるも、腫瘍は却つて増大するのみ
にて大人頭大となり、右側腹半部を占むに至り憊
悴甚だしく惻愴の極に達せしを以て、本年 4 月我
津田外科教室に官費入院せり。當教室に於ても廣
島縣立病院と同様の見解の下に先づ X 線其の他の
検査をなしたる後、試験的開腹術を行ひて腹部腫
瘍より試験的切片を取り鏡檢し、更に死後死體解
剖により兩肺臟の轉移を發見すると共に、進んで
詳細なる検索の後、本腫瘍は精系腫瘍を原發とし
腹部及び肺臟腫瘍は其の轉移にして、組織學的に
横紋筋纖維を有する粘液腫様、纖維腫様、肉腫性
混合腫なる事を認めり。腹部腫瘍及び兩肺轉移腫
瘍に於ては粘液腫、肉腫組織大部分を占め筋纖維
甚だしく、反之精系腫瘍は組織緻密にして細胞に
富み肉腫様組織大部分をなし、粘液腫様の部は邊

縁の一部に限られ、筋組織は前兩者に比して一般
に發達せり。

精系及び英膜に發生する腫瘍は一般に稀有なる
に、更に横紋筋纖維を有する混合腫に至りては文
獻上極めて少し。睪丸の混合腫は惡性の經過を取
るもの多きに反し、精系及び英膜に發生する混合
腫は可成り良性の經過を示し轉移も亦遅きものあ
りと言はるるに余の例は甚だしく惡性を現はし X
線効果は毫も認め得ざりき。

2. 頸部絞壓の後發性死亡及び其の 法醫學的意義

岡山醫科大學法醫學教室

谷 耕 一 君

多田 隈 建 雄 君

頸部の完全なる絞壓 (Strangulation) に因り人
は殆ど苦惱を覺えることなく瞬時に且容易に死因
に至るを以て、古來洋の東西を問はず、自殺或は
他殺の手段として好んで用ひられる。此頸部絞壓
によりて人が意識を失へる場合に辿るべき徑路は
次の 4 つを考へることを得。即ち

1) 絞壓→意識脱出→意識回復

2) 絞壓→意識脱出→假死→死

3) 絞壓→意識脱出→假死→蘇生

4) 絞壓→意識脱出→假死→蘇生→死

1), 2) の場合は暫くをき、3) 及び 4) の場合
に於ては蘇生せる後に種々なる病的現象を招來す
ることあるを以て、醫學上興味深く、殊に法醫學
上、極めて重要なる意義を有するものなり。其の
病的現象の中、殊に注目し得るものは、肺及び心
の機能が整調となるに至りて始めて現はる強直
性或は間代性の全身痙攣と意識とを回復したる後
に認めらるる處の逆行性記憶脱出、指南力障礙等

なり、1889年 Wagner が此病的現象の成因機轉を Asphyxie 及び頸部動脈壓迫に基く腦の器質變化にありと發表するや Möhnis は、精神原「ヒステリー」説を唱へて之に極力反對し兩者の論争は茲に俄然識者間に注目せらるる所となり、爾來縊頸蘇生者及び其の病的現象の成因機轉に関する研究報告は相踵いで發表せられ其の多くは 3) の場合たる頸部絞壓に於ける蘇生者が其の症例として對照せらるるのみにして 4) の場合たる後發生死亡が症例として對照せられたることは極めて少し、予等は頸部絞壓の後發生死亡の 2 例を経験することを得たるを以て之を茲に報告する次第なり。

第 1 例は 73 歳の老婆なり、獨身生活をなしつつありたる此老婆が突如夜半襲撃したる一強盜により絞頸せられたる爲假死に陥り一旦蘇生せるも意識を回復することなく遂に 7 日目に死亡せるものなり。

剖檢所見として特に注目す可きものは腦蜘蛛膜下出血、頸部皮膚に於ける帶狀の出血斑及び肋膜下及び咽頭の粘膜下に溢血點、左右頸動脈及び筋膜の大小の出血、肺炎及び各臓器に認めらる老人性變化なり。夫等の中、老人性變化は他に重要な所見なき場合に考慮せらるべく、窒息死も亦當らず、從つて先づ考ふ可きは蜘蛛膜下出血及び肺炎なり。犯人の自供及び死亡に至るまで老婆を看護せし、其の妹の言を参照するに悉く被害者は絞頸せられて、假死の状態に陥りしを、犯人は既に死亡せるものと誤認し遁走したる後、壓迫の弛緩に由り自發的に蘇生したるものにして、此際頭部特に頭腔内の鬱血、血壓上昇及び心臟機能の回復は蜘蛛膜下出血其の他の出血を招來し Gwillan の所謂嗜眠型を呈し約 7 日間を生きたるものなる可く、其の死の近因としては其の後に發生したる肺炎なることは推定に難からず。

第 2 例は縊頸蘇生後に死亡せし 37 歳の男なり、看守の油斷に乗じて獨居全房視察孔の鐵棒に自己着用の囚人用帶の兩端を固定し、生ずる係蹄部に頸部をかけて 2 回纏繞し、左右兩脚を床上に前方へ投出し腰を屈して縊頸せるを巡回看守に發見せられ、直ちに救助せられたものであるが、心、肺の機能整調となるに従ひて強直竝に間代性全身痙攣を再三起し遂に意識を恢復することなく肺炎を起し縊頸後 6 日目に死亡せるものなり。

剖檢所見として注意せられる可きものは頸部の索溝、大脳穹窿部竝に小腦等に於ける軟腦膜下出血、各所の溢血點及び肺炎である。臨牀所見と剖檢所見とを比較審按するに非定型的なる縊頸の爲め頭腔内の極度の鬱血、血壓上昇を發來せると他方心臟機能の回復と相俟つて廣汎なる軟腦膜下出血を來し運動中樞の刺戟及び鬱血による CO_2 瓦斯の過荷竝に新陳代謝產物の堆積（カルバミン酸アンモニア、石灰等）、酸化作用不充分なるに基く炭水化物新陳代謝の異常（焦性葡萄糖の生成、乳酸の蓄積が）深部感覺刺戟となりて痙攣を惹起せるものと推定せられ而して演者の 1 人谷は動物實驗により出血死のものと縊死のものととの腦髓中の乳酸を定量比較せるに後者の方が多量なるを認め尙ほ同人は焦性葡萄糖に就いても檢索を進めつつあり。斯くて恐くは咽喉頭粘膜の反射機能不全竝に肺鬱血等により蘇生後に「カタル」性肺炎を併發し、後發生死亡を招來せるものなり。

以上予等の 2 例と從來報告せられたる後發生死亡の 13 例より觀察し得たところを總括すれば次の如し。

1) 從來報告せられたる頸部絞壓後後發性死亡は非定型的縊頸に多く、一般の後發性死亡例に於て發現する症狀は種々の原因に基くならんも、腦質に於ける酸化作用の不全及び之に基く新陳代謝產物の蓄積竝に解剖學的變化等は其の主なるもの

にして、此點に於て予等は Wagner 説に賛意を示すものなり。

2) 頸部絞壓に於ける溢血點の發生は絞壓に依り血液循環、血液自體及び血管壁に物理的或は化學的變異を生じ、即ち炭酸或は其の他新陳代謝產物の蓄積、「アドレナリン」分泌過剰血壓上昇、血管壁攣縮等を來し、血管壁殊に毛細血管壁に器質的變化を來し、出血を來すものなるが、更に死亡の後發性なるに因り血行機能が、絞頸と同時に停止するに至らざるは該出血を一層顯著増大ならしむるものなり。

3) 頸部絞壓の後發性死亡の死の近因としては急性肺炎最も多きものの如し。

4) 頸部絞壓後1度蘇生し、後發性に死亡せるものは検屍に際して剖検し、頸部絞壓による變化及び死の近因を明にし、以て或は起る世間の疑惑を未然に防ぐ可きなり。即ち第1例は獨身生活をなせること、老齡なること及び意識不明なることより推定し、恐く犯人の自供なかりせば、腦出血なる診斷のもとに葬られたるやも量られず、第2例の如きは縊首蘇生後に於て軟腦膜下出血を來し遂に肺炎の爲め死亡せしものなるが、若し解剖によりて此結論を得ざりしならんには「縊死即ち變死なるに死亡診斷書には死因を「腦溢血」即ち病死と記載せり」との非難に對し充分なる解明を與へること不可能なりしならん。

3. 昭和12年夏期流行性腦炎の病理解剖學的所見に就て (標本供覽)

岡山醫科大學病理學教室

教授 田 部 浩 君

菊 澤 隆 尙 君

岡 宏 君

昭和12年夏期剖検せる流行性腦炎12例に就き中樞神經系統以外の諸臓器に於ける病理解剖學的所見を述べ、且其の組織學的標本を供覽せり。

肺臓に於て既知の肺炎と異なる瀰漫性肺泡隔炎を必發すること、脾臓・淋巴腺・扁桃腺及び消化管粘膜に於ける淋巴装置等の急性炎性變化、肝臓星細胞の肥大等は本病例に於ける特殊所見となすべきなり。尙ほ肝臓の漿液性炎・脾臓萎縮及び諸内分泌腺に於ては萎縮又は機能低下像或は機能亢進像を認めたり。本例に於て細網内皮系並に之と同様の機能を有する肺胞上皮が、中樞神經系統のHortega細胞と同じく急性反應性變化を呈することを明にしたり。

右終りて午後6時閉會す、當日の出席者は40餘名なりき。

◎岡山醫學會第386回通常會

同會は昭和13年1月20日午後4時より岡山醫科大學に於て
開會の豫定なり